九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

青年は「裏切られ体験」をどう受け止めているのか：アタッチメントの観点から

朝木，玲奈
九州大学大学院人間環境学府

古川，依里香
九州大学大学院人間環境学府

志方，亮介
精華女子短期大学

古賀，聡
九州大学大学院人間環境学研究院

https://doi.org/10.15017/2232326

出版情報：九州大学総合臨床心理研究. 10, pp.25-32, 2019-03-27. 九州大学大学院人間環境学府附属総合臨床心理センター
バージョン：
権利関係：

Bulletin of Center for Clinical Psychology and Human Development, Kyushu University
Vol. 10, pp. 25－32.

青年は「裏切られ体験」をどう受け止めているのか
―アタッチメントの観点から―

朝木玲奈　九州大学大学院人間環境学府　／古川依里香　九州大学大学院人間環境学府　／
志方亮介　精華女子短期大学　／古賀　聡　九州大学大学院人間環境学研究院

要約

本研究では，青年が親密な友人による「裏切られ体験」をどのように受け止めているのかを検討することを目的とした。高等学校の５年制専攻科の女子学生 310 名を対象に質問紙調査を行った。親密な友人に裏切られる場面を提示し，青年が友人から裏切られた時の感情および対処行動についての尺度を作成した。また「裏切られ体験」とアタッチメント・スタイルの関連について検討を行った。因子分析の結果，青年は「裏切られ体験」に対して「怒り」「抑鬱」「不安」といった複数の感情を抱き，「解決回避」「話し合い」「自省」「関係継続」「成長志向」という対処行動を行うことが示された。また，「怒り」を感じる者ほど相手との関係継続を拒み，「抑鬱」や「不安」を感じる者ほど自身の行動を振り返る「自省」行動を行うことが示された。これらのことから，「裏切られ体験」はその内容や裏切られたと感じる程度，相手との関係性によって受け止め方が異なることが示唆され，さらにそれにはアタッチメント・スタイルという個人が形成している他者との愛情の絆の型の違いが影響している可能性が見出された。

キーワード：裏切られ体験，アタッチメント，受け止め方

Ⅰ．問題と目的

青年期は，親から心理的にも社会的にも自立し，確固たる自己を形成していく時期であるとされる。児童・思春期に比べると，青年期になると社会との関わりが大幅に増大し，また社会との関係で自分を見つめ直し，自己を形成していく時期でもある（大川原，2008）。また，笹山・久保（1994）は，社会との関わりの中から，人は親密な対人関係を形成していき，心理的安定や精神的・物質的援助など，多くの利益や報酬を獲得するとしている。さらに，青年期では，それ以前に形成された関係以外に，多様な対人関係が形成されていくなど，青年期は生涯にわたる対人関係を考えるうえでとても重要な時期とされる（酒井，2001）。Heider（1978）は，対人関係という用語には，１人の人がもう１人の人についてどのように考えまた感じるか，また相手及び相手が自分に対して何をし何を考えると期待するか，相手の行為に対してどのように反応するかなどの事柄が含まれるとしている。そのなかで，「友人関係」は親から心理的・社会的自立を果たす際に重要な役割を担い，友人関係で深い友情が育てられるかどうかは，その青年の自己形成に大きな影響を与えるとされる（大川原，2008）。

しかしながら，親密な対人関係において，人々はポジティブな経験ばかりではなく，時にネガティブな出来事をも経験する。長沼・落合（1996）は，青年期における同性の友達とのつきあい方において，女子学生は男子学生に比べて同性の友人と密着した関係を持っており，ありのままの自分を出してつきあう，傷ついても本音でつきあう，友達に頼って相談するといった傾向があるとしている。しかし，下斗米（2000）が，対人関係の親密化を扱う研究を概観し，対人関係における当事者間での役割行動の期待と遂行により親密感が高められ，また，その他者行動が個人の要求充足や期待に見合う遂行でない場合に引き起こされる葛藤があることを指摘していることを踏まえると，女子学生は密着した相手の行動に対する期待が高く，それに伴い，期待に見合う遂行でない場合の葛藤も大きくなることが考えられる。つまり，親密な他者に自分の予期に反する行動をなされた場合，青年期において特に女子青年は，裏切られたという気持ちを強く抱くと考えられる。また，木村（2017）は，土居（1985）の日本文化的人間関係である内と外に対応する「オモテ」と「ウラ」において，「オモテとは外に出すもの，ウラとは外に出さずに内にしまっておくもの」というニュアンスがあるという理論から，「裏切る」はしまっておいた心を切ることを意味し，裏切られる体験は，内にしまっておいた心を切られることであり，人間関係が親密であるからこそ起こりうるとしている。さらに，木村（2017）は，裏切られる体験には相手をポジティブに感じている準備の時期と，そのポジティブな理解が実は間違っており，それだけでなく自分が傷つけられたり，搾取されたり，利用されたと被害的に感じるような出来事に遭遇するという２段階があると述べている。以上のことから，筆者は，「裏切られ体験」を「親密な対人関係において役割期待に反する行為をされることで，傷ついたり被害的に感じたりする体験」と定義する。ただし，この「裏切られ体験」は，経験される出来事は同じでも，出来事を体験する人によって受け止められ方が異なってくると考えられる。

ところで，対人関係に関わる理論として，アタッチメント理論が注目されている。Bowlby（1969）によると，アタッチメントとは，ある特定の人と他の特定の人の間に形成される愛情の絆であり，乳幼児期からの養育者との相互作用によって形成されると考えられている。さらに，Bowlby（1969，1973，1980）の内的作業モデル理論が注目されたことから青年期以降のアタッチメント研究も展開されるようになった。Bowlby（1969，1973，1980）によると，内的作業モデルとは，「その個人特有の対人関係を判断する枠組み（モデル）であり，あらゆる対人関係での出来事を解釈し処理するのを手助けするもの」と定義されている。内的作業モデルは，対人関係に限らず，現実の出来事に対する認識や，個人が行動を起こす際の結果の大まかな予測を立てるためのスクリプトとしても無意識的に作動することから（戸田，1991），周囲の環境に対する評価や，環境からの要請に対する反応の個人差を生み出す要因として捉えることができる。青年期のアタッチメント・スタイルと社会的適応性の関連を検討した金政・大坊（2003）は，アタッチメント・スタイ

ルの違いによって精神健康状態や親密な異性との関係における自分の印象が異なることを示している。また，女子大学生におけるアタッチメント・スタイルとストレスコーピングならびに精神的健康との関連を検討した立丸ら（2010）は，安定群が他の群に比べて問題焦点型コーピング，情動焦点型コーピングを実行しやすいことを報告している。以上のことから，筆者は，「裏切られ体験」の受け止め方の違いにも，アタッチメント・スタイルの違いが影響しているのではないかと考える。

以上のことから，本研究では，青年期の対人関係のうち「友人関係」に着目し，青年が親密な友人による「裏切られ体験」をどのように受け止めているのかを検討することを目的とする。具体的には，親密な友人に裏切られる場面を１つ提示し，青年がその「裏切られ体験」をした際にどのような感情を抱くのか，またどのような対処行動を取るのかについて検討する。その際，それらに与えるアタッチメント・スタイルの影響についても検討する。

Ⅱ．方法

１．調査対象者と調査時期

X年12月に，高等学校の５年制専攻科の女子学生310名を対象に，個別自己記入形式の質問紙調査を実施した。回答依頼時には，文書と口頭で説明合意を得た。年齢は15～21歳（M=17.63, SD=1.424）であった。

２．質問紙の構成

１）フェイスシート

学年，年齢について回答を求めた。

２）アタッチメント・スタイル尺度

中尾・加藤（2004）による一般他者版成人愛着スタイル尺度（ECR－GO），Brennan et al.（1998）によるExperiences in Close Relationships（ECR）を参考に，本研究の趣旨に合う形で教示と項目を設定した。教示は，「以下のそれぞれの文は，『あなたが普段の対人関係の中で抱く他者への気持ちや感じ方』にどれくらいあてはまりますか。現在の対人関係での経験だけでなく，いろいろな対人関係の中であなたが普段よく体験していることを思い浮かべながら，それぞれの文についてあなたの考えに最も当てはまる番号に○をつけてください。」とし，30項目について７件法で回答を求めた。

３）裏切られたという気持ちを生起させる場面の想定

親密な友人を想起させ，その友人から裏切られる場面を設定した上で，どのくらい「裏切られた」と感じるかについて「全く感じない」から「非常に強く感じる」までの６段階評定で回答を求めた。場面は，笹山・久保（1994）の「裏切られたという気持ちを生起させる状況」項目と，下斗米（2000）の「役割行動期待尺度」において，親友に求める役割行動として葛藤が生起しやすいと認められた「自律性」「力動性」の項目を参照した上で，「親友に秘密をばらされる」という場面を採用した。教示は，「あなたには，親密だと思う友人がいます。その友人とは，互いの秘密を話すような仲です。ですが，その友人が，その友人だけに話していたあなたの秘密を周囲に言いふらしていることが耳に入ってきました。あなたは，どの程度裏切られたと感じますか。」とした。

４）裏切られたときに生起する感情尺度

笹山・久保（1994）の「裏切られた時に生起する感情」項目，寺崎・岸本・古賀（1992）の「多面的感情状態尺度」を参考に，33項目を抽出し独自に作成した。先述の場面を想定した際に生起する感情について，「全く感じない」から「はっきり感じる」までの４件法で回答を求めた。

５）裏切られたときにとる対処行動尺度

笹山・久保（1994）の「裏切られた時にとる対処行動」項目，加藤（2000）の「大学生用対人ストレスコーピング尺度」を参考に50項目を抽出し，独自に作成した。先述の場面においておこなう対処行動について，「あてはまらない」から「よくあては

表１．アタッチメント・スタイル尺度についての因子分析結果（$N = 310, R^2 = 1474.91$）

		第１因子	第２因子	共通性
第１因子	見捨てられ不安（α = .92）			
1	(10) 私はひとりぼっちになってしまうのではないかと心配する	.75	.17	.67
2	(24) 私は誰かとのかかわりがないと，何となく不安で不安定な気持ちになる	.74	-.26	.50
3	(6) 私は，知り合いを失うのではないかと結構心配している	.70	.19	.61
4	(26) 私は，私が望むくらいに人がそばにいてくれないと，イライラしてしまう	.70	-.14	.45
5	(8) 私はいつも，人が私に対して抱いてくれている気持ちが，私が人に対して抱いている気持ちと同じくらい強ければいいのになあと思う	.69	-.20	.44
6	(14) 私には，人が私に対して好意的であるということを何度も何度も言ってくれることが必要だ	.69	-.10	.44
7	(5) 私が人のことを大切に思うほどには，人が私のことを大切に思ってないのではないかと心配している	.66	.23	.58
8	(16) 私は時々，（知り合いに）もっと感情を表したり自分たちの関係を大切にしてほしいと感じる	.66	-.33	.42
9	(4) 私は，いろいろな人との関係について，非常に心配している	.66	.14	.51
10	(2) 私は，見捨てられるのではないかと心配だ	.64	.32	.64
11	(28) 私は，必要な時にいつでも人が私のためにいてくれないとイライラする	.63	-.19	.37
12	(30) 私は，知り合いが私のことをほっといて一人で何かをすることが重なってくると腹が立ってきてしまう	.63	-.20	.36
13	(12) 私が人ととても親密になりたいと強く望むがために，時々人はうんざりして私から離れていってしまう	.63	.01	.39
14	(9) 私があまりに人に完全に気持ちをあわせたがるために，時々人はうんざりして私から離れていってしまう	.57	.14	.40
15	(20) 私はもし人に自分のことを好きになってもらえなかったら，気が動転したり腹が立ったりする	.56	-.05	.30
16	(22) 私が親密になりたいと望むほどには，人は私と親密になりたいと思っていないと思う	.49	.27	.39
17	(29) 人に「ダメだなあ」と言われると，自分は本当にダメだなあと感じる	.46	.13	.26
18	(18) 私は，（知り合いに）見捨てられるのではないかと心配になることはほとんどない（R）	.41	.15	.22
第２因子	親密性回避（α = .83）	第１因子	第２因子	
19	(13) 私は人とあまり親密にならないようにしている	.06	.65	.45
20	(7) 私は人に心を開くのに抵抗を感じる	.17	.61	.46
21	(19) 私は，人とあまりに親密になることがどちらかというと好きではない	-.11	.61	.34
22	(11) 私は，心の奥底にある考えや気持ちを人に話すことに抵抗がない（R）	-.15	.60	.33
23	(1) 心の奥底で何を感じているのかを人に見せるのはどちらかというと好きではない	.00	.58	.34
24	(15) 私は比較的容易に人と親密になれると思う（R）	.06	.53	.31
25	(21) 私は，人に何でも話す（R）	-.29	.53	.27
26	(3) 私は，人と親密になることがとてもここちよい（R）	-.25	.51	.25
27	(25) 私は人に頼ることに抵抗がない（R）	.03	.50	.26
28	(27) 私は，人になぐさめやアドバイス，助けを求めることに抵抗がない（R）	.00	.45	.21
29	(17) 私は，人に頼ることはなかなかできないと思う	.17	.42	.25
	因子間相関		.29	

注：括弧内の数字は質問紙で提示された順番を示す

まる」までの4件法で回答を求めた。

6）裏切られたという気持ちを生起させる場面の自由記述

調査対象者が「裏切られた」と感じる場面について，本研究で設けた場面以外の場面を補完的に理解するために自由記述による回答を求めた。自由記述の教示を「あなたは，対人関係において『裏切られた』と感じる場面はありますか？先程の場面と同じものでも構いません。思いつく場面を下の枠内に箇条書きで自由に記述してください。」と設定した。

Ⅲ．結果

1．各尺度の検討

1）アタッチメント・スタイル尺度

アタッチメント・スタイル尺度の30項目について，最尤法による因子分析を行った。因子数は，先行研究に倣い2因子を指定し，プロマックス回転を行った。因子負荷量を考慮して1項目削除し，最終的に2因子29項目を採用した。因子名は先行研究に倣い，第1因子を【見捨てられ不安】因子（$\alpha = .92$），第2因子を【親密性回避】因子（$\alpha = .83$）とした。結果を表1に示す。

2）裏切られたときに生起する感情尺度

前述の手続きで作成された33項目について，項目の平均値，標準偏差を算出したところ，それぞれ天井効果とフロア効果が見られた13項目を削除した。残り20項目に対して，最尤法・プロマックス回転による因子分析を行った。因子負荷量を考慮して6項目削除し，最終的に3因子14項目を採用した。第1因子は「怒った」などの相手や出来事に腹を立てて不快に感じている状態を表す6項目で構成されているため，【怒り】因子（$\alpha = .89$）と命名した。第2因子は「絶望した」などの予想だにできない出来事に遭遇して気持ちの晴れない状態を表す5項目で構成されているため，【抑鬱】因子（$\alpha = .85$）と命名した。第3因子は「心配な」などの気がかりで気持ちが落ち着かない状態を表す3項目で構成されているため，【不安】因子（$\alpha = .81$）と命名した。結果を表2に示す。

3）裏切られた時にとる対処行動尺度

前述の手続きで作成された50項目について，項目の平均値，標準偏差を算出したところ，それぞれフロア効果が見られた26項目を削除した。残り24項目に対して，最尤法・プロマックス回転による因子分析を行った。因子負荷量を考慮して3項目削除し，最終的に5因子21項目を採用した。第1因子は「そのことにこだわらないようにする」などの自分の気持ちや出来事自体に直面することを回避する5項目で構成されているため，【解決回避】因子（$\alpha = .85$）と命名した。第2因子は「裏切った理由をそれとなく相手に聞いてみる」などの相手の気持ちを確認したり自分の気持ちを伝えたりする4項目で構成されているため，【話し合い】因子（$\alpha = .83$）と命名した。第3因子は「裏切られた原因が自

表2．裏切られたときに生起する感情尺度についての因子分析結果
（$N = 310, R^2 = 283.89$）

第1因子 怒り（$\alpha = .89$）		第1因子	第2因子	第3因子	共通性
1	(11) 怒った	.87	-.02	-.03	.74
2	(4) 不機嫌な	.78	-.16	.14	.55
3	(6) 許せない	.76	.13	-.18	.63
4	(17) むっとした	.75	-.05	.09	.57
5	(1) 憎らしい	.70	.03	.01	.51
6	(23) むしゃくしゃした	.47	.31	.09	.57
第2因子 抑鬱（$\alpha = .85$）		第1因子	第2因子	第3因子	
7	(28) 絶望した	.11	.83	-.16	.68
8	(30) 無気力な	-.1	.76	.08	.58
9	(27) ぼうぜんとした	-.13	.73	.14	.55
10	(29) 信じたくない	.22	.57	-.12	.45
11	(25) 沈んだ	.05	.51	.31	.57
第3因子 不安（$\alpha = .81$）		第1因子	第2因子	第3因子	
12	(3) 心配な	.04	-.14	.82	.58
13	(19) 不安な	.01	.04	.81	.70
14	(14) 悩んでいる	-.01	.23	.61	.58
	因子間相関	第1因子	第2因子	第3因子	
	第1因子	–	.62	.31	
	第2因子	–	–	.56	
	第3因子	–	–	–	

注：括弧内の数字は質問紙で提示された順番を示す

表3．裏切られたときにとる対処行動尺度についての因子分析結果（$N = 310, R^2 = 116.51$）

第1因子 解決回避（$\alpha = .85$）		第1因子	第2因子	第3因子	第4因子	第5因子	共通性
1	(44) そのことにこだわらないようにする	.89	.02	-.08	-.01	.01	.78
2	(43) 気にしないようにする	.88	-.02	-.02	.01	-.05	.73
3	(45) 何とかなると思う	.70	.04	-.05	.14	.08	.54
4	(46) そのことは忘れるようにする	.68	.02	-.04	-.03	.05	.48
5	(41) 何もせず、自然の成り行きに任せる	.50	-.18	.21	-.04	-.05	.34
第2因子 話し合い（$\alpha = .83$）							
6	(17) 裏切った理由をそれとなく相手に聞いてみる	.07	.81	.02	-.01	-.08	.63
7	(12) 相手にあなたの気持ちを伝える	-.06	.78	-.07	.07	.07	.63
8	(7) 裏切った理由を追求する	.01	.75	.05	-.3	-.08	.59
9	(2) 相手と話し合う	-.09	.70	-.10	.15	.11	.55
第3因子 自省（$\alpha = .79$）							
10	(15) 裏切られた原因が自分にあると考える	.00	-.12	.79	.07	-.07	.52
11	(14) 裏切られた理由を考える	-.07	.25	.72	.01	-.16	.62
12	(28) 自分のことを見つめ直す	-.07	-.09	.69	-.02	.21	.60
13	(31) 相手の気持ちになって考えてみる	-.08	.11	.52	.13	.18	.48
14	(49) 自分の態度を改める	.08	-.06	.43	-.05	.35	.49
15	(4) 他のことをして気をまぎらわす	.25	-.05	.41	-.10	-.14	.20
第4因子 関係継続（$\alpha = .67$）							
16	(13) 相手を許す	.18	.12	.07	.77	.03	.69
17	(3) 今後も相手との関係を維持するよう努める	.07	.14	.11	.68	-.05	.55
18	(33) 他の友人を作る	.09	.26	.06	-.52	.04	.32
19	(42) 相手と適度な距離を保つようにする	.21	.12	.10	-.45	.14	.32
第5因子 成長志向（$\alpha = .77$）							
20	(47) これも社会勉強だと思う	.07	-.05	-.06	-.06	.84	.70
21	(39) この経験で何かを学んだと思う	-.05	.07	.07	-.04	.72	.58
	因子間相関	第1因子	第2因子	第3因子	第4因子	第5因子	
	–		-.15	.18	-.02	.38	
	–	–		.42	.14	.19	
	–	–	–		.09	.53	
	–	–	–	–		.02	
	–	–	–	–	–		

注：括弧内の数字は質問紙で提示された順番を示す

表4．裏切られたと感じる程度と裏切られたときに生起する感情と対処行動の相関分析結果

	裏切られたと感じる程度	怒り	抑鬱	不安	解決回避	話し合い	自省	関係継続	成長志向
程度	−	.60**	.50**	.29**	-.10	.27**	.16**	-.31**	.07
怒り		−	.60**	.34**	-.08	.26**	.16**	-.41**	.04
抑鬱			−	.55**	.02	.27**	.41**	-.25**	.17**
不安				−	-.02	.18**	.47**	.01	.19**
解決回避					−	-.17**	.20**	-.06	.32**
話し合い						−	.33**	.04	.15*
自省							−	.02	.48**
関係継続								−	-.11
成長志向									−

**. 相関係数は1%水準で有意（両側）
*. 相関係数は5%水準で有意（両側）

表5．青年が裏切られたと感じる状況についての自由記述結果

状況	下位分類	自由記述の内容例
秘密の暴露		言ってほしくないことを言われ他の友達とけんかになった
悪口	（直接的）悪口	友達に容姿のことを言われた
	陰口	私のいない場所で悪口を言っていた
	印象低下	知らないところで根も葉もない噂を流された
約束の反故	約束の反故	約束を破られる，約束を忘れられる
	約束の軽視	自分への相談なしに，一緒にしていたことをキャンセルされる
嘘	嘘	嘘をつかれた
	恋愛関係	私が好きだった人を友達にとられた
抜け駆け	想定外	友人に恋人が出来た
	出し抜き	「勉強してない」と言っているのにめっちゃ勉強してた
関係性の変化	関係性の回避	みんなで行こうと行っていた場所に自分抜きで行かれた
	一方的な悪化	仲良かった友達から突然無視された
	いじめ	仲が良かった友達にいじめられた
開係性の偏り	関係性の軽視	先約のこちらの約束よりも，後の約束を優先された
	関係性の甑匪疎外	自分が相手にしている対応，コミュニケーションと同じことを，相手がしてくれない
		私だけ知らない話をみんなが共有してる
不徳	言動の棚匪	言っていることと行っている行動が違った
	金銭関係	お金を貸したのに，返さずに忘れていた
	プライバシー侵害	勝手に携帯を見られた
	倫理観の欠如	ひとによって態度を変える，人を悪者にして自分が好かれようとする
	期待はずれ	相談しても淡泊な返事しか返ってこない

分にあると考える」などの自身の言動を振り返ってじっくりと考えようとする6項目で構成されているため，【自省】因子（α = .79）と命名した。第4因子は「相手を許す」などの相手と今までと同じ関係を続ける4項目で構成されているため，【関係継続】因子（α = .69）と命名した。第5因子は「これも社会勉強だと思う」など，今回の「裏切られ体験」を新たな学習や経験の一つとして受け入れようとする2項目で構成されているため，【成長志向】因子（α = .77）と命名した。結果を表3に示す。

2．「裏切られ体験」の検討

1）本研究で設定した「裏切られ体験」の場面の検討

本研究で設定した「親友に秘密をばらされる」状況に対して，青年が裏切られたという気持ちをもつかを知るために平均値を求めたところ，M=4.78（SD=1.22）と高い得点を示した。これは，笹山・久保（1994）の研究を支持する結果であった。本研究で設定した場面は青年女子にとって「裏切られ体験」の場として認識されており，本研究で「裏切られ体験」を想起する条件としての妥当性が示された。

次に，裏切られたと感じる程度の強さとそのとき生起する感情，そのときとる対処行動との関連性を調べるために，相関分析を行った。結果を表4に示す。分析の結果，裏切られたと感じる程度の強さは全ての感情と有意な正の相関を示した。また，裏切られたと感じる程度の強さは「話し合い」行動と正の相関，「関係継続」行動と負の相関を示していた。

さらに，各感情尺度得点と各対処行動尺度得点との相関分析を実施したところ以下の結果が示された。「怒り」の感情得点は「話し合い」行動得点と正の相関，「関係継続」行動得点との負の相関を示した。「抑鬱」感情得点は「話し合い」行動得点と「自省」行動得点との間にそれぞれ正の相関，「関係継続」行動得点との間に負の相関を示した。「不安」感情得点は「自省」行動得点との間に正の相関を示した。

2）自由記述による「裏切られ体験」の状況の検討

自由記述により回答された「裏切られ体験」の内容を整理した。なお，この手続きは臨床心理士有資格者1名と筆者の計2名での協議により行った。分類は，「裏切られ体験」の定義にある「役割期待に反する行為」に基づき，相手にされた行為，またはされなかった行為によってカテゴリーを分類した。その後，同質の状況をまとめて整理した。その結果，青年が裏切られたと感じる場面は大きく8つのカテゴリーが抽出された。抽出されたカテゴリー及び具体的な記述例を表5に示す。

3．アタッチメントが「裏切られ体験」に与える影響の検討

見捨てられ不安高低2群と親密性回避高低2群を独立変数，裏切られたと感じる程度・裏切られたときに生起する感情・裏切られたときにとる対処行動を従属変数とする，2要因被験者間分散分析を行った。その結果，【関係継続】得点において「見捨てられ不安」と「親密性回避」との間に有意な交互作用が示された（F (1,306) = 12.60, p < .01）。また【怒り】得点においては両要因の交互作用効果について有意傾向が示された（F (1,306) = 3.65, p < .10）。交互作用が示されたため単純主効果の検定を行った。【関係継続】行動について検討を行った結果，「見捨てられ不安」低群における「親密性回避」の単純主効果が有意であり（F (1,306) = 12.60, p < .001），親密性回避高群よりも親密性回避低群の方が【関係継続】行動を行うことが示された。また有意傾向が示された【怒り】について「見捨てられ不安」高群における「親密性回避」の単純主効果について有意な傾向が示され（F (1,306) = 3.65, p < .10），親密性回避高群よりも親密性回避低群の方が【怒り】を感じやすい傾向が示された。

表6．見捨てられ不安および親密性回避と「裏切られ体験」に伴う感情・行動の二要因被験者間分散分析

見捨てられ不安	低群		高群				
親密性回避	低群 (SD)	高群 (SD)	低群 (SD)	高群 (SD)	見捨てられ不安	親密性回避	交互作用
裏切られたと感じる程度	4.80 *.12*	4.56 *.14*	5.19 *.15*	4.90 *.11*	7.97** 高＞低	4.17* 低＞高	.03
怒り	2.61 *.08*	2.64 *.10*	3.09 *.10*	2.79 *.08*	12.47*** 高＞低	2.31	3.65 † 不安高：回避低＞高
鬱憤	2.16 *.09*	2.28 *.10*	2.77 *.11*	2.63 *.09*	37.67*** 高＞低	.02	1.92
不安	2.20 *.09*	2.15 *.11*	2.77 *.11*	2.63 *.09*	26.86** 高＞低	.91	.25
解決回避	2.19 *.09*	2.14 *.10*	2.12 *.11*	2.23 *.08*	.01	.12	.75
話し合い	2.48 *.10*	2.27 *.12*	2.69 *.12*	2.40 *.09*	2.61	5.32* 低＞高	.14
自省	2.09 *.07*	1.88 *.09*	2.40 *.09*	2.39 *.07*	27.35*** 高＞低	1.85	1.73
関係継続	2.66 *.07*	2.18 *.08*	2.27 *.09*	2.35 *.07*	1.97	6.71* 低＞高	12.60*** 不安低：回避高＞低
成長志向	2.12 *.10*	2.05 *.12*	2.25 *.12*	2.15 *.10*	1.18	.61	.02

*† p < .10, * p < .05, *** p < .001*

また，「見捨てられ不安」の高低において有意な主効果が示され，見捨てられ不安低群よりも見捨てられ不安高群の方が裏切られたと感じ（F (1,306) = 7.97, p < .01），【怒り】（F (1,306) = 12.47, p < .001）や【抑鬱】（F (1,306) = 37.67, p < .001）や【不安】（F (1,306) = 26.86, p < .001）を感じ，【自省】行動（F (1,306) = 27.35, p < .001）を行うことが示された。また，「親密性回避」の高低において有意な主効果が見られ，親密性回避高群よりも親密性回避低群の方が裏切られたと感じ（F(1,306) = 4.17, p < .05），【自省】行動（F (1,306) = 5.32, p < .05）や【関係継続】行動（F (1,306) = 6.71, p < .05）を行うことが示された。結果を表6に示す。

Ⅳ．考察

1．青年の「裏切られ体験」について

結果より，青年は本研究で設定した「親しい友人に秘密をばらされる」という状況において，裏切られたという気持ちを抱くことが示された。笹山・久保（1994）は，人が自分の望む行動を相手がしなかった場合（不作為的誤謬）よりも，自分の望まない行動を相手にされた場合（作為的誤謬）により強く裏切られたという気持ちを抱くことを示している。本研究の結果も，作為的誤謬により強く裏切られたという気持ちを抱いていることが考えられ，「裏切られ体験」想起場面として妥当であったと考えられる。また，「裏切られ体験」に関する自由記述の結果から，「裏切られ体験」における「役割期待に反する行為」はいくつかの状況があることが示された。また，作為的誤謬と不作為的誤謬が混在している状況も見られた。これらの結果から，青年が裏切られたと感じる状況には様々な構造があることが推察される。今後は，各「裏切られ体験」の状況の違いや，親密な相手の違いによって生起する感情や対処行動が異なるのかを検討することで，さらに「裏切られ体験」の構造を検討することができると考える。

2．青年の「裏切られ体験」の受け止め方について

裏切られたときには，「怒り」，「抑鬱」，「不安」といったネガティブな感情が生起しやすいことが示された。この結果は，親しい人物に裏切られることによって，青年は不安になったり気持ちが沈んだり，自分を裏切った友人に対して敵対心を抱くことを示している。また，裏切られたときにとる対処行動については，「関係継続」や「話し合い」といった実際の行動と「解決回避」「自省」「成長志向」といった個人の中で行われる観念的な行動が行われやすいことが示された。この結果は，裏切られたときにはすぐに相手に理由を追及したり関係を動かす行動をしたりするだけではなく，一旦出来事を受け止め，そのうえでどう行動するかを考える段階があるということを示していると考えられる。一方で，裏切られたと感じる程度と「話し合い」行動に正の相関，「関係継続」行動に負の相関があったことから，裏切られたと感じるほど相手との関係性を変える可能性のある直接的な行動が行われやすいことが示された。さらに，裏切られたときに生起する感情と対処行動との関係については，「怒り」感情は「話し合い」行動との正の相関，「関係継続」行動との負の相関があり，「不安」感情は「自省」行動との正の相関があった。この結果から，「怒り」のように相手に対する感情を抱いている場合は話し合いで相手に自身の考えを伝えたり，相手と関わることをやめたりといった行動をとり，「不安」のように自身の感情を抱いている場合は「自省」のような自分を見つめ直す行動をとることが考えられる。

3．アタッチメント・スタイルによる「裏切られ体験」の受け止め方について

本研究では，青年の「裏切られ体験」の受け止め方について調査し，さらにアタッチメントの観点をふまえて検討を行った。まず，「裏切られ体験」想起場面に遭遇した際には，「見捨てられ不安」が高いほど強く裏切られたと感じること，「親密性回避」が高いほど裏切られたと感じにくいことが示された。「裏切られ体験」は相手への信頼感が覆されたときに生じるものである。「見捨てられ不安」は他者の行動に対する反応性として理解でき，裏切られるという場面に対して顕著に生起すると考えられる。他方「親密性回避」は自らが他者から距離をとる能動的な反応様式であると考えられる。「親密性回避」の傾向が高い者は，元来の他者への信頼感を抱きにくく「裏切られ体験」場面に遭遇した際に裏切られたと感じにくいと考えられる。

また，「裏切られ体験」が生起する場面におけるアタッチメント・スタイルの影響について検討した結果，一部「見捨てられ不安」と「親密性回避」の交互作用効果が示された。まず，「見捨てられ不安」が低い者のうち「親密性回避」が低い者の方が「親密性回避」が高い者よりも「関係継続」行動をとりやすいこと

が示された。見捨てられ不安が低く他者との親密さを回避しやすい者は他者との関係性に執着せず，自律的な対人関係様式を持つことが推察される。そのため，「裏切られた」という自分が害される体験に直面するとそれまでの関係に執着せず，関係の終結に抵抗を示さないと考えられる。他方，見捨てられ不安が低く他者との親密性を回避しない者は，他者からの行動に対して不安が生起しにくく他者との関係も適度な距離をとろうとする。この要因に該当する者は比較的安定的で柔軟な対人関係を築くことが考えられる。そのため「裏切られ体験」についても，その出来事に対する建設的な解決を試み，関係性の維持や修復に取り組むことが考えられる。また，「裏切られ体験」場面において「見捨てられ不安」が高い者のうち「親密性回避」が低い者の方が「親密性回避」が高い者よりも「怒り」を感じやすい傾向が示唆された。親密性回避の傾向が低い者は他者との関係性において，過度に距離を取ったりせず，適度な距離をとろうとする。そうした傾向を持つ者において，「見捨てられ不安」が高い者は裏切られる場面についてより顕著に否定的な体験として感じ取ることが示唆された。相手に向けた自らの信頼をないがしろにされた体験は脅威的なものとして認識され，親密な他者と自分の関係性に対立的な構造をもたらすため「怒り」の感情を生起させやすいと考えられる。しかしながら，本研究においてはさほど強い効果があると示されたわけではないため，親密な関係における「裏切られ体験」が関係性の変容にもたらす可能性については今後の課題となる。

また，裏切られたときに生起する感情について，「見捨てられ不安」が高いほど裏切られたときに「怒り」，「抑鬱」，「不安」といった感情を抱きやすいということが示された。この結果は，裏切られたと感じる程度の強さと各感情との相関があることを踏まえると，裏切られたと感じやすい「見捨てられ不安」の高い人は，裏切られたと感じると同時に様々なネガティブな感情を抱きやすいと解釈できる。

さらに，裏切られたときにとる対処行動については，「見捨てられ不安」が高いほど「自省」行動を行うことが示された。また，「親密性回避」が低いほど「話し合い」行動や「関係継続」行動を行うことが示された。加藤（1998）によると，「見捨てられ不安」の高さは「自己観」のネガティブさ，つまり，他者からの受容への依存性が高いことであるとされる。また，「親密性回避」の高さは「他者観」のネガティブさ，つまり，他者への不信感や親密関係を抱くことへの拒絶感があることであるとされる。このことを踏まえると，本研究の結果からは，「自己観」がネガティブで他者へ依存する者は，裏切られた理由が自分にあると考え自分を見つめ直し，「他者観」がポジティブで他者と親密な関係を抱くことへの拒否感が低い者は，相手とのポジティブな関係継続につながる行動を行うことが示唆された。

V．本研究の限界と今後の課題

本研究では，質問紙を使って，親密な友人に秘密をばらされる「裏切られ場面」を設定し，青年期に当たる対象者が，どのように「裏切られ体験」を受け止めているのかについての調査を行い，さらに，アタッチメント・スタイルとの関連を検討した。その結果，青年は「裏切られ体験」に対して「怒り」，「抑鬱」，「不安」といった感情を抱き，「解決回避」，「話し合い」，「自省」，「関係継続」，「成長志向」という対処行動を用いて「裏切られ体験」を受け止めていることが示された。さらに，「見捨てられ不安」や「親密性回避」の程度の違いにより，「裏切られ体験」の受け止め方が異なることが示された。

今後は，自由記述の分析によって見出されたようなその他の「裏切られ場面」においても同様の感情を抱き，同様の対処行動をとりうるのかについて検討する必要がある。また，アタッチメント形成と内的作業モデルの形成はその人の現在に至るまでの対人関係が影響していることを考慮すると，今後は性差や所属に至るまでの生涯発達の違いにも着目して調査を進めると，より詳細な理解が可能になることが考えられる。また，本研究ではアタッチメントを測定する尺度として４カテゴリーの２次元からなる尺度を参考に使用した。しかしながら，中尾・加藤（2003）では，現時点では多変数における愛着スタイルの特徴をより適切にとらえるためには，４カテゴリーの２次元の尺度のみでは結果が不明瞭であると報告されている。今後の研究では，より詳細にアタッチメント・スタイルの違いによる「裏切られ体験」の受け止め方を調査するために，複数の尺度を用いたり，複数の状況設定を行うことにより，アタッチメント・スタイル間の差異をより詳細に明らかにすることが出来るとともに，それぞれのスタイルの青年が抱く対人関係上の葛藤理解にもなりうると考えられる。

謝辞

本稿は2017年度の九州大学教育学部の卒業論文の調査結果を元に執筆したものです。本研究を進めるにあたり，調査にご協力いただきました学生の皆様に心より感謝申し上げます。

引用文献

Bowlby, J. (1969). *Attachment and Loss*. Vol. 1 *Attachment*. London : The Hogarth Press. 黒田実郎・大羽蓁・岡田洋子・黒田聖一（訳）(1976). 母子関係の理論Ⅰ　愛着行動．岩崎学術出版社．

Bowlby, J. (1973). *Attachment and Loss*. Vol. 2 *Separation : Anxiety and anger*. London : The Hogarth Press. 黒田実郎・岡田洋子・吉田恒子（訳）(1977). 母子関係の理論Ⅱ　分離不安．岩崎学術出版社．

Bowlby, J. (1980). *Attachment and Loss*. Vol. 3 *Loss : Sadness and depression*. London : The Hogarth Press. 黒田実郎・吉田恒子・横浜恵三子（訳）(1981). 母子関係の理論Ⅲ　対象喪失．岩崎学術出版社．

Brennan, K. A., Clark, C. L., & Shaver, P. R. (1998). Self-report measurement of adult romantic attachment : An integrative overview. In J. A. Simpson & W. S. Rholes (Eds.), *Attachment theory and close relationships*. New York : Guilford Press. pp. 46-76.

土居健郎（1985）．表と裏．弘文堂．

Heider, F. (1958). *The Psychology of Interpersonal Relations*. Newjersey : Lawrence Erlbaum Associates. 大橋正夫（訳）(1978). 対人関係の心理学．誠信書房．

金政裕司・大坊郁夫（2003）．青年期の愛着スタイルと社会的適応性．心理学研究，74，466-473.

加藤和生（1998/1999）．Bartholomewらの4分類愛着スタイル尺度（RQ）の日本語版の作成．認知・体験過程研究，7，41-50.

加藤司（2000）．大学生用対人ストレスコーピング尺度の作成．教育心理学研究，48，(2)，225－234.

木村大樹（2017）．裏切られる体験についての心理臨床学的考察．京都大学大学院教育学研究科紀要，63.

長沼恭子・落合良行（1996）．同性の友達とのつきあい方からみた青年期の友人関係．青年心理学研究，10，35-47.

中尾達馬・加藤和生（2003）．成人愛着スタイル尺度間にはどのような関連があるのだろうか？―4カテゴリー（強制選択式，多項目式）と3カテゴリー（多項目式）との対応性―．九州大学心理学研究．4，57-66.

中尾達馬・加藤和生（2004）．“一般他者”を想定した愛着スタイル尺度の

信頼性と妥当性の検討．九州大学心理学研究，5，19-27.
大川原憲司（2008）．青年期の社会的な自己の発達．永井撤（監修）井上果子・神谷栄治（編）．ライフサイクルの臨床心理学シリーズ2　思春期・青年期の臨床心理学．培風館，pp. 107-133.
酒井厚（2001）．青年期の愛着関係と就学前の母子関係―内的作業モデル尺度作成の試み．性格心理学研究，9，(2)，59-70.
笹山郁生・久保憲史（1994）．裏切りの心理的構造．福岡教育大学紀要，43，(4)，299-311.
下斗米淳（2000）．友人関係の親密化過程における満足・不満足感及び葛藤の顕在化に関する研究―役割期待と遂行のズレからの検討―．実験社会心理学研究，40，(1)，1-15.
立丸恵・中谷隆・堀匡・大塚泰正（2010）．女子大学生における愛着スタイルとストレスコーピングならびに精神的健康との関連．心理臨床学研究，28，(3)，336-340.
寺崎正治・岸本陽一・古賀愛人（1992）．多面的感情状態尺度の作成．心理学研究，62，(6)，350－356.
戸田弘二（1991）．Internal Working Models研究の展望．北海道大学教育学部紀要，55，133-143.

How young people react to "Betrayed experience"? ; in terms of Attachment

Reina ASAKI, Erika FURUKAWA
Graduate School of Human-Environment Studies, Kyushu University
Ryosuke SHIKATA
Seika Woman's Junior College
Satoshi KOGA
Faculty of Human-Environment Studies, Kyushu University

The purpose of this research was to examine how young people perceive a "betrayal experience" by intimate friends. The researcher conducted a survey with a questionnaire involving a scenario of betrayal by intimate friends among 310 female students of a five-year high school in order to analyze the types of emotions experienced, types of coping behaviors engaged in, and type of attachment style related to the performance of a "betrayal experience" by a youth. The results of a factor analysis showed that the participants felt multiple emotions such as "anger," "depression," and "uneasiness" toward a "betrayal experience." Further, "resolution avoidance," "discussion," "self-reflection," "relationship continuation," and "self-growth," were the coping behaviors engaged in after a "betrayal experience." In particular, those who felt "anger" refused to continue the relationship with the partner, and those who felt "depression" or "anxiety" were shown to engage in "self-reflection" behavior, that is, looking back on their own actions. Based on these findings, it is suggested that the way a "betrayal experience" is perceived differs depending on its contents, the extent to which one feels betrayed, and the relationship with the opponent ; furthermore, this perception may be affected by attachment style and the emotional connection with a particular opponent.

Keywords: Betrayal experience, attachment, reaction